

人には瞬時に解ける。その屈辱感
は、彼にとつて新たな試練となつた。しかし、その厳しさが彼を成長させる糧ともなつた。忙しさや疲れもあったが、それは彼が真剣に数学、そして人生に取り組んでいた証拠である。数学という領域での挑戦は、近藤さんにとつて、自己を試す場であり、また新たな自己を発見する場でもあつた。それは、彼がこれからどのような道を選ぶにせよ、貴重な経験となることであろう。そして、その過程で感じた疲れや屈辱も、彼が次に進むステップにおいて、きつと力となる。近藤さんの大学院を卒業した後のキャリアは、数学からコンピュータの世界へと舞台を移した。初めての仕事は「三」という会社で、当初はコンピュータについてほとんど知識がなかった。「アドレス」という基本的な概念すら知らない状態で、会社説明会と一次面接に参加する。その後、富士通研究所という会社で面接を受けるも、最終的には「協調性がない」という理由で落とされる。この時期にはすでに大学院時代から付き合っていた奥さんがいたが、仕事の厳しさによつてプライベートはなかなか充実していなかった。「三」での初めての

富士通研究所という会社で面接を受けるも、最終的には「協調性がない」という理由で落とされる

仕事は、大変な炎上プロジェクトに参加する形となつた。その後、「三」のパッケージ「シングワークス」を担当するが、本心ではあまり面白くないと感じていた。一方で、数学の研究に自由に取り組み時間ができ、それが唯一の楽しみであつた。プログラムやアプリケーション開発の「楽しさ」が最初は理解できなかった近藤さん。しかし、物作りが好きだという建前を通して仕事を続け、徐々にその面白さを感じ始める。近藤さんのこの時期は、数学という厳格な領域から、より多様で応用範囲の広いコンピュータの世界へと移行する過程であり、その中で多くの挫折と成長

を経験している。それは新たな舞台での「一つの流れ」であり、これからのような道を選ぶにせよ、その経験は彼の人生において貴重なものとなるでしょう。近藤さんのキャリアは、初めての仕事で「補佐」の役割に回されたことから、サーバーインフラエンジニアとしての専門性を築くまで、多くの変遷を経てきた。最初は何も分からない状態で、家に帰ってはメールの仕組みなどを一生懸命勉強する日々だった。しかし、その努力が実を結び、「一〇」年でサービスを形にしていくなかで、台湾のプロジェクトに参加し、新たな経験を積む。同時に、勉強会での機械学習に触れ、そ

の面白さに目覚める。特に、りょうちゃんとの出会いは、外の世界を見せてくれた大きなきっかけとなつた。そして、奥さんの病気をきっかけに福岡に帰り、二〇エンジニアとして新たな仕事に就く。当初はマネージャーになるつもりはなかったが、現在はそのような役割を担っている。近藤さんのこれまでの二〇年間は、感覚も変わり、多くのことを学び取ってきた。それは、一つ一つの出来事や人々との出会いが、彼自身を形作っている証拠である。何も分からなかった頃から、今では多くの人に影響を与える立場になっている。それは、彼自身の努力と、周囲の人々との繋がりによつて成し得たことであり、その成長過程自体が、一つの大きな「価値」とあると言えるでしょう。